

# 家庭科における男子学習者の興味・関心について

## On the Interest and the Concern of the Male student in Homemaking

(1991年4月3日受理)

大橋 登史子  
Toshiko Ohashi

**Key words:** 家庭科学習の興味・関心, 家庭の働き・仕事, 家庭科の教師像

### はじめに

平成6年度より高等学校家庭科は男女ともに必修となり、男女が共に学ぶことになっている。その基本方針では、男女が協力して家庭生活を築いていくこと、生活に必要な知識と技術を習得させることなど、また社会の変化等を考慮し、消費生活、高齢者の生活などに関する内容の充実がみられる。家庭を取り巻く環境の変化に対応し、親となるための自覚を高め、よき家庭人として家庭生活の充実向上を図る実践的な態度を育てることがあげられている。

そこで今回は、男女共学の家庭科のあり方について、高等学校男女生徒の今までの家庭科学習に対する意識ならびに興味・関心がどのようになっているか知ろうとするものである。

### 方 法

1. 調査方法は、質問紙法で、対象は倉敷市内の県立高等学校2校(普通科)で、1校あたり120名と130名計250名に配布した。回収率は240名(96%)であった。前回調査した小学校・中学校・高等学校は、今回の調査対象高等学校の学区内である。

2. 調査年月日 1990年6月～7月

3. 調査内容

- 1) 過去に家庭科を実習して興味をもった領域
- 2) 家庭科学習に対する興味・関心
- 3) 男女高校生の家庭科学習状況
- 4) 調理学習での学習習得状況
- 5) 高校生の望む既習の家庭科学習の内容
- 6) 家庭の働きと仕事に対する男女共同責任
- 7) 家庭科学習に対する男女生徒の認識
- 8) 高校生の望む家庭科の教師像

## 研究結果および考察

### 1. 過去に実習した家庭科で興味をもった領域

表1に示すように興味をもった領域は、一番多いのは「食物」で女子は90名(75.6%)で、男子71名(58.7%)となっており男女ともに興味をもって学習している。この「食物」の学習に興味をもつのは、家庭の食生活で栄養のバランスをとることの必要性、家族揃って食事をとること、さらに男子は、将来社会に出て単身赴任をした場合、自分で献立を作り、調理をして生活して行くのに役立つものとして考えられているように思う。

次に男子で興味をもった学習は、「電気」26名(21.5%)、「工作」17名(14.3%)で、これらは男子の好む教科であることがわかる。女子の場合、次に多いのは「被服」で13名(10.7%)となっている。「食物」領域の学習は、男女とも興味・関心の最も高いものであるが、これに次ぐ興味・関心には、男子と女子とでは違いのあることがみられる。

表1 過去に実習した家庭科で興味をもった領域

領域 性別	食 物	被 服	住 居	生 活 管 理	保 育	電 気	工 作	家 族 関 係	人 数
男	71 (58.7)	0 (0)	2 (1.7)	2 (1.7)	1 (0.8)	26 (21.5)	17 (14.0)	2 (1.7)	121
女	90 (75.6)	13 (10.9)	2 (1.7)	2 (1.7)	9 (7.6)	0 (0)	1 (0.8)	2 (1.7)	119
計	161 (67.1)	13 (5.4)	4 (1.7)	4 (1.7)	10 (4.2)	26 (10.7)	18 (7.5)	4 (1.7)	240

### 2. 家庭科学習に対する興味・関心

#### (1) 家庭科のすき・きらい

表2-1 家庭科のすき、きらい

関心度 性別	す き	どちらでもよい	き ら い	人 数
男	41 (33.9)	62 (51.2)	18 (14.9)	121
女	61 (51.3)	44 (37.0)	14 (11.8)	119
計	102 (42.5)	106 (44.2)	32 (13.3)	240

(2) 家庭科のすきな理由

表 2-2 家庭科のすきな理由

内容 性別	全体がす き	縫うのが すき	ミシン縫 いがすき	調理がす き	手芸がす き	先生がす き	住まい方 がよくわ かる	洗たく、 掃除がす き	おいしい ものが食 べられる	人数
男	5 (12.2)	0	0	18 (43.9)	0	1 (2.4)	1 (2.4)	1 (2.4)	15 (36.6)	41
女	8 (13.1)	4 (6.6)	2 (3.3)	36 (59.0)	2 (3.3)	0 (0)	0 (0)	3 (4.9)	6 (9.8)	61
計	13 (12.7)	4 (3.9)	2 (2.0)	54 (52.9)	2 (2.0)	1 (1.0)	1 (1.0)	4 (3.9)	21 (20.6)	102

家庭科学習が「すき」か「きれい」かについて見ると、「すき」という者が男子41名（33.9%）、女子は61名（51.3%）で男子より女子が多くなっている。

男子は「すき」に比べて「どちらでもよい」が多く62名（51.2%）になっており、女子は「どちらでもよい」が44名（37.0%）となっているが、「きれい」は男子18名（14.9%）女子14名（11.8%）で、あまり開きはない。

表 2-1 に示すように、「すき」とする者男女合わせて102名のうち、その理由として表 2-2 「調理がすき」では男子18名（43.9%）、女子36名（59.0%）になっており、男女とも「調理」への関心が最も多くなっている。次に「おいしいものが食べられる」という理由では、男子15名（36.6%）、女子6名（9.8%）になっており男子の方が「おいしいものが食べられる」という関心の強いことがうかがえる。「調理がすき」と「おいしいものが食べられる」を合わせると、男子33名、女子42名でいずれも「食物」への関心には男女の違いのないことがいえる。日常の食生活は勿論のこと、将来に向けても人間の「食」に対する欲望は強く、生活の土台となるものとみることができる。

(3) 家庭科のきれいな理由

表 2-3 家庭科のきれいな理由

内容 性別	家庭科全 体がきら いだから	説明され てもわか らないか ら	縫うのが きれいだ から	調理する のがきら いだから	家庭の買 い物をす るのがき らいだか ら	住まいを の考えの がきれい だから	その他	答なし	人数
男	4 (22.2)	4 (22.2)	5 (27.8)	2 (11.1)	1 (5.6)	1 (5.6)	0	1 (5.6)	18
女	4 (19.0)	0	9 (42.9)	0	0	1 (4.8)	7 (33.3)	0	21
計	8 (20.5)	4 (10.3)	14 (35.9)	2 (5.1)	1 (2.6)	2 (5.1)	7 (18.0)	1 (2.6)	39

次に家庭科がきらいな理由(表2-3)として、「縫うのがきらい」とするのは、男子5名(27.8%)、女子9名(42.9%)がきらいとなっている。また「家庭科全体がきらい」というのが男4名(22.2%)女子も4名(19.0%)で、全く家庭科の学習を好まないものもいるが、「説明されてもわからない」とする者が女子には皆無なのに、男子には4名いることは、今後の男女共学の家庭科を進めるに当たって考慮しなければならない点であろうと思われる。

### 3. 男女高校生の家庭科学習状況

(1) 男女が共に家庭科を学習するとすれば、どんな内容の学習がよいかということを示すと表3-1の通りである。これによると男子では、「調理」とするもの92名(76.0%)で調理の学習に意欲をもつものが多いことがわかる。女子では68名(57.1%)で男子より少なくなっている。次に多いのは「家庭経済」で女子では21名(17.8%)、男子は8名(6.6%)で調理に比べれば少ないが、「保育」、「住居」、「家庭関係」等の学習を望むものが男女ともにみられる。

表3-1 男女が共に家庭科を学習するとすれば、どんな内容の学習がよいか

領域 性別	調 理	保 育	家 族 関 係	家 庭 経 済	住 居	被 服 製 作	手 芸	衣生活の あり方	人 数
男	92 (76.0)	8 (6.6)	4 (3.3)	8 (6.6)	8 (6.6)	0 (0)	0 (0)	1 (0.8)	121
女	68 (57.1)	11 (9.2)	7 (5.9)	21 (17.8)	8 (6.7)	1 (0.8)	2 (1.7)	1 (0.8)	119
計	160 (66.7)	19 (7.9)	11 (4.6)	29 (12.1)	16 (6.7)	1 (0.4)	2 (0.8)	2 (0.8)	240

#### (2) 高校における家庭科学習に対する生徒の見解

高等学校の男子では、「基礎的なことは男子も受けた方がよい」45名(37.2%)、女子では76名(63.9%)になっており、男子よりも女子の方が「基礎的なことは男子も学習することを多く望んでいる。つぎに「今まで通りでよい」とするものは男子32名(26.4%)に対して女子は8名(6.7%)で少なく男女共学に対する関心は女子の方が高いが、前述のように「基礎的なことの学習」に示す男子の関心も高い。こ

表3-2 家庭科学習に対する生徒の見解

項目 性別	今まで通りで よい	何とも思わ ない	わ か ら な い	基礎的なことは男子も受けた方がよい	男女わけて学 習するとよい	答 な し	人 数
男	32 (26.4)	31 (25.6)	6 (5.0)	45 (37.2)	6 (5.0)	1 (0.8)	121
女	8 (6.7)	22 (18.5)	7 (5.9)	76 (63.9)	6 (5.0)	0 (0)	119
計	40 (16.7)	53 (22.1)	13 (5.4)	121 (50.4)	12 (5.0)	1 (0.4)	240

れに対して「何とも思わない」という無関心なものも男子31名(25.6%)、女子22名(18.5%)いることがわかる。

#### 4. 調理実習での習得状況

##### (1) 調理実習における実技習得状況

中学校の「技術・家庭」の食物教材内容としてあげられているものと、高等学校「家庭一般」であげられているものについて、その実技習得状況を見ると、表4-1に示す通りである。「ひとりでできるもの」としては、「たまご焼き」が男子96名(79.3%)、女子114名(95.8%)で最も多く、「カレーライス」が、男子56名(46.3%)、女子103名(86.6%)で2番目に多くなっている。次は「みそ汁」男子48名(39.7%)、女子91名(76.5%)で、次に「ポテトサラダ」男子45名(37.2%)、女子97名(81.5%)で以上のものは男女ともにひとりでできると思っている。これに反して男子では、「焼き魚」38名(31.4%)、「ちらしずし」7名(5.8%)、「天ぷら」15名(12.4%)、「ハンバーグステーキ」13名(10.7%)と少なくなっているが、「ひとりでできるようにになりたい」とするものでは、男子は「ハンバーグステーキ」69名(57.0%)、「天ぷら」59名(52.7%)、「ちらしずし」48名(39.7%)、「焼き魚」46名(38.0%)と意欲をもっている者が多数いる。この現象を女子についてみると、「ひとりでできる」とする調理は男子より幅広くなっているが、「焼き魚」、「ちらしずし」では、ひとりでできるようにになりたいとするものが男子より多い。「できなくてもよい」とするのは男子にみられるが、ことに「ポテトサラダ」、「焼き魚」、「ちらしずし」、「天ぷら」、「ハンバーグステーキ」等に多くみられる。

表4-1 調理実習における実技の習得の要求

対 象	項 目					人 数
		ひとりでできる	できるようになりたい	できなくてよい	答 な し	
た ま ご 焼	男	96(79.3)	17(14.0)	8( 6.6)	0( 0 )	121
	女	114(95.8)	5( 4.2)	0( 0 )	0( 0 )	119
ポ テ ト サ ラ ダ	男	45(37.2)	41(33.9)	35(28.9)	0( 0 )	121
	女	97(81.5)	20(16.8)	2( 1.7)	0( 0 )	119
み そ 汁	男	48(39.7)	52(43.0)	21(17.4)	0( 0 )	121
	女	91(76.5)	28(23.5)	0( 0 )	0( 0 )	119
カ レ ー ラ イ ス	男	56(46.3)	53(43.8)	12(9.9)	0( 0 )	121
	女	103(86.6)	15(12.6)	1( 0.8)	0( 0 )	119
焼 き 魚	男	38(31.4)	46(38.0)	37(30.6)	0( 0 )	121
	女	62(52.1)	52(43.7)	5( 4.2)	0( 0 )	119
ち ら し ず し	男	7( 5.8)	48(39.7)	66(54.5)	0( 0 )	121
	女	20(16.8)	90(75.6)	8( 6.7)	0( 0 )	119
天 ぷ ら	男	15(12.4)	59(52.7)	47(38.8)	0( 0 )	121
	女	62(52.1)	53(44.5)	3( 2.5)	1( 0.8)	119
ハンバーグステーキ	男	13(10.7)	69(57.0)	39(32.2)	0( 0 )	121
	女	69(58.0)	46(38.7)	3( 2.5)	1( 0.8)	119

この場合「ひとりでできる」という自己評価では、インスタント食品、レトルト食品の活用が背景にあることもうかがえるので、家庭科学習での教材選択と、実生活への還元とを考慮する必要があると思われる。調理は家庭生活とくに、食生活の充実という点から不可欠な作業とみられるので、義務教育の段階ならびに、男女共学の高校家庭科において基礎をふまえ、その広がりをもてるように仕向けることも必要であろう。

(2) 調理実習の小・中・高校生の習得状況の比較

「ひとりでできる」という教材の中「たまご焼き」「カレーライス」「みそ汁」「ポテトサラダ」が男女共に実技の習得がよいので小・中・高校生と比較して見た。

① 「たまご焼き」は、小・中・高校で、男女とも(71.2%)以上のものが「ひとりでできる」と自己評価している。「たまご焼き」は小学校6年生の教材にあり、蛋白質の熟凝固の基礎実習として生活に還元されているものではないかと思われる。

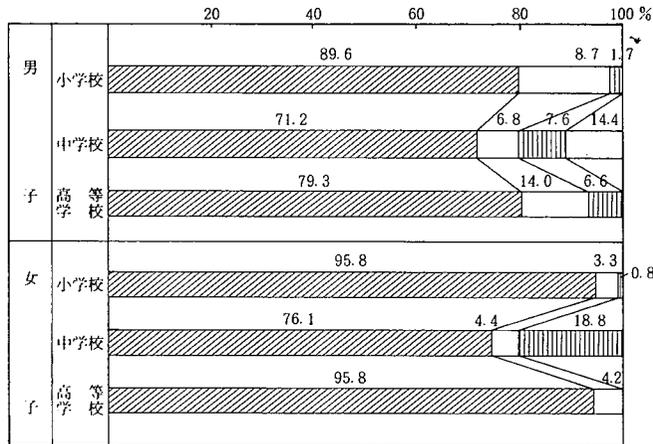


図4-1 たまご焼きの小・中・高校生の習得状況

② 「カレーライス」は、小・中・高校での男子は(45%)以上が「ひとりでできる」としており、女子はさらに多く(65%)以上ができるとしている。「カレーライス」は最近の食生活の傾向では、年齢を問わず好まれており、一般に広く普及している。ことに若い人達の間では、コマーシャルによる簡単で、容易に出来る方法とも併せて家庭でよく作られるものではないかと思われる。

③ 「みそ汁」は小・中・高校の男子は、小(51.3%)、中(38.9%)高(39.7%)となっている。小学校の6学年教材で学習して間のあいてない時期では、学習効果は50%をこえているが、中・高校では減少しており、日常生活では男子は「みそ汁」に対する「ひとりでできる」という自己評価は低い。これに比べると、女子は小(75.8%)、中(64.9%)、高(76.5%)と多くなっている。「みそ汁」は「たまご焼き」に比べれば操作が少し複雑になることから、男子では面倒な調理と思っているものが多いようにみられる。

④ 「ポテトサラダ」では、男子の場合、小(39.1%)、中(25.5%)、高(39.7%)となっている。女子では小(70.0%)、中(57.5%)、高(81.5%)となっている。男子の小・中・高の40%以下に対して、女子は50%をこえており、高校では(81.5%)と高くなっている。小学校では、5学年で「野菜サ

家庭科における男子学習者の興味・関心について

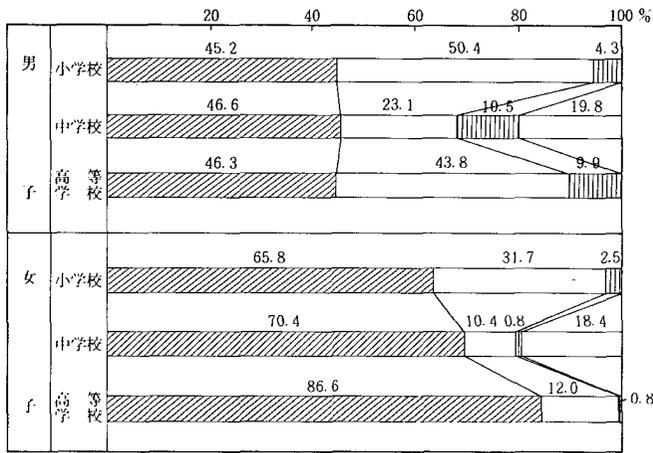


図 4-2 カレーライスの小・中・高校生の習得状況

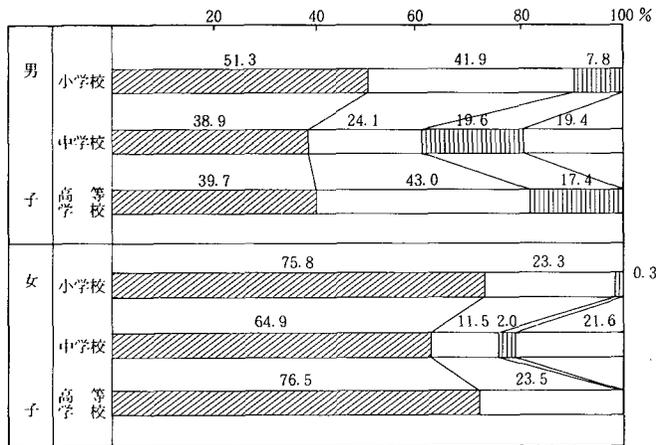


図 4-3 みそ汁の小・中・高校生の習得状況

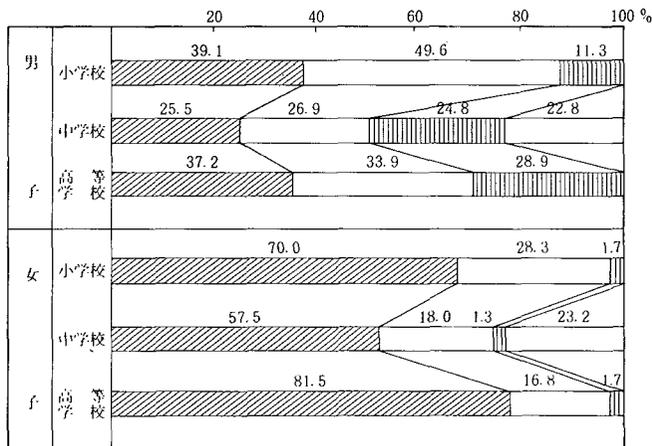


図 4-4 ポテトサラダの小・中・高校生の習得状況

ラダ」の学習があるし、6学年では「じゃがいもの調理」の学習もあり、小学校の生徒で高くなっているのは、学習してあまり時間的間隔がないからであろうと思われる。しかし男子、女子を各学校ごとに見ると、これらの一品でない多少複雑になる調理では男子の方にひとりですきというものが低くなってくる傾向がみられる。

## 5. 既習の家庭科学習に対する願望

(1) 家庭科の学習経験の中で習得しておきたかったものを高校生について示すと表5-1の通りである。

表5-1 家庭科の学習経験の中で、習得しておきたかったもの

項目 性別	調理などで工夫する経験	栄養のバランス	物を最大にいかす習慣	社会生活に必要な心得と実践法	家庭経済管理的な処法	編物（製図を含）	品質・表示の見分け方	家族生活のあり方	答なし	人数
男	58 (47.9)	30 (24.8)	17 (14.0)	3 (2.5)	3 (2.5)	0 (0)	5 (4.1)	2 (1.7)	3 (2.5)	121
女	52 (43.7)	39 (32.8)	3 (2.5)	6 (5.0)	3 (2.5)	9 (7.6)	4 (3.4)	1 (0.8)	2 (1.7)	119
計	110 (45.8)	69 (28.8)	20 (8.3)	9 (3.8)	6 (2.5)	9 (3.8)	9 (3.8)	3 (1.3)	5 (2.1)	240

学習経験の中で、「調理などで工夫する経験」の習得は男子58名（47.9%）、女子52名（43.7%）であり開きはない。「栄養のバランス」については男子30名（24.8%）より女子は39名（32.8%）でいくらか多いが、「物を最大にいかす習慣」では男子17名（14.0%）に比べ女子は3名（2.5%）で少ない。女子の場合「物を最大にいかす習慣」が出来ているので少ないのか、男子の場合高校生になってこの習慣がないことに気づくことによって、女子より多くなっているのか分からないが、家庭教育の中で培う機会が少ないなら、学校教育ことに家庭科教育の中で培う教材について考慮することも必要であろうと思われる。「社会生活に必要な心得の実践方法」、「家庭経済・管理的な処法」、「家族生活のあり方」等についての願望が少ないことは高校生としては現在それほど関心のあるものとしていないことがみられる。

### (2) 家庭の働きに対する認識

家庭の働きでは、「家族みんなが楽しくすごす」のがよいとするものが、男子68名（56.2%）、女子85名（71.4%）になっていて、日常の家庭生活は何はともあれ「皆で楽しく過ごしたい」という気持ちの現れともみられる。「子どもを生み育てる」では男子16名（13.2%）の方が女子5名（4.2%）より多くなっており、女子の家庭生活に対する認識の変化の現れともみられるし、男子の方は従来の家庭に対する考え方が多く残存しているものとみられる。また「夫婦が一緒にくらす」では男子8名（6.6%）より女子12名（10.1%）の方がいくらか多くなっており、「父親の単身赴任という社会現象は女性の方に影響が大きいものともみられる。

表 5-2 家庭の働きに対する認識

内容 性別	子どもを 生み育て る	夫婦が いっしょ にくらす よす	くらしに 必要な 金を得る	その家の 習慣を受 けついで いく	家族みな が楽しく すごす	休んだり 寝たりす る	くらしに 必要な ものをつ くる	子どもを よい人間 に育てる	老人や病 人などが 守られる	近所の人 や友だち とつきあ う	人数
男子	16 (13.2)	8 (6.6)	7 (5.8)	1 (0.8)	68 (56.2)	6 (5.0)	1 (0.8)	10 (8.3)	2 (1.7)	2 (1.7)	121
女子	5 (4.2)	12 (10.1)	6 (5.0)	0 (0)	85 (71.4)	3 (2.5)	0 (0)	5 (4.2)	3 (2.5)	0 (0)	119
合計	21 (8.8)	20 (8.3)	13 (5.4)	1 (0.4)	153 (63.8)	9 (3.8)	1 (0.4)	15 (6.2)	5 (2.1)	2 (0.8)	240

(3) 家庭の仕事をおもに誰がすれば良いか

① 「子どものしつけ」では、男子は「父母がすればよい」61名 (50.4%)、女子では68名 (57.1%) になっており、父母が協力して「子どものしつけ」をするものとしている。次は家族全体で男子26名 (21.6%)、女子32名 (26.9%) になっており、両親が協力し共同責任で子どもの教育に当たることを当然としている。

表 5-3 家庭の仕事をおもに誰がすればよいか

仕事	家族		父	母	父と母	おじいさん、おばあさん	家族全員	その他	わからない	人数
	性別									
子どものしつけ	男子		4 (3.3)	29 (24.0)	61 (50.4)	1 (0.8)	26 (21.5)	0 (0)	0 (0)	121
	女子		2 (1.7)	17 (14.3)	68 (57.1)	0 (0)	32 (26.9)	0 (0)	0 (0)	119
近所とのつきあい	男子		0 (0)	21 (17.4)	8 (6.6)	2 (1.7)	88 (72.7)	2 (1.7)	0 (0)	121
	女子		1 (0.8)	11 (9.2)	9 (7.6)	0 (0)	95 (79.8)	0 (0)	3 (2.5)	119
親類とのつきあい	男子		4 (3.3)	0 (0)	12 (9.9)	0 (0)	103 (85.1)	1 (0.8)	1 (0.8)	121
	女子		2 (1.7)	1 (0.8)	7 (5.9)	1 (0.8)	107 (89.9)	0 (0)	1 (0.8)	119
生活するお金を家庭に入れる	男子		65 (54.2)	2 (1.7)	39 (32.2)	1 (0.8)	8 (6.6)	2 (1.7)	4 (3.3)	121
	女子		55 (46.2)	2 (1.7)	55 (46.2)	0 (0)	4 (3.4)	1 (0.8)	2 (1.7)	119
学校の集りなどの出席	男子		2 (1.7)	84 (69.4)	22 (18.2)	0 (0)	3 (2.5)	1 (0.8)	9 (7.4)	121
	女子		0 (0)	85 (71.4)	25 (21.0)	0 (0)	2 (1.7)	4 (3.4)	3 (2.5)	119

② 「近所とのつき合い」では、男子は「家族全体」でつき合うことが多く88名(72.7%)、女子では95名(79.8%)になっている。家庭生活の維持・運営の面から近所のつき合い等の社会的なものは家族の共同責任とする者が多いことがみられる。

③ 「親類とのつき合い」では、「家族全員」ですが男子103名(85.1%)、女子では107名(89.9%)になっている。家庭生活でのこれらの仕事は特定の人だけがしなくてもよし、相互の協力でなすべきものとの見方が多い。

④ 「生活するお金を家庭に入れる」では、男子は「父」65名(54.2%)、女子55名(46.2%)になっている。女性の社会進出が増加している現在、共働きの家庭ということもあり「父」のみとするのが男子では「父母」の39名より多いが女子の場合は、「父」と「父母」とが同数で母親の社会的に働くことを認めるものの多いことがわかる。

⑤ 「学校の集まりなどの出席」については、男子の「母」が84名(69.4%)、女子の「母」は85名(71.4%)になっており、母親が全責任をもって学校に出席するものとしている。

## 6. 家庭の働きと仕事に対する男女共同責任

家庭の仕事を男女でどのように分担すればよいかについて表6に示す。

高校生では「男女が話し合いでする」は、男子66名(54.5%)、女子85名(71.4%)になっており、家庭の仕事を男女で話し合ってすることを希望している。次は「男女平等にすればよい」では、男子34名(28.1%)、女子30名(25.2%)になっており、これからの家庭は男女話し合って男女平等に仕事することを望んでいる。

表6 家庭の仕事を男女でどのように分担すればよいか。

項目 性別	男女平等にすればよい	男女がはなし合いでする	女だけがすればよい	わからない	答なし	人数
男子	34 (28.1)	66 (54.5)	13 (10.7)	7 (5.8)	1 (0.8)	121
女子	30 (25.2)	85 (71.4)	1 (0.8)	3 (2.5)	0 (0)	119
合計	64 (26.7)	151 (62.9)	14 (5.8)	10 (4.2)	1 (0.4)	240

## 7. 家庭科学習内容に対する男女生徒の認識

高校における男女が共に学ぶ家庭科の学習内容について表7に示すように「調理」では女子だけがあるというものが少なく「男女平等にする」「男女話し合ってきめる」等、共学の調理・学習を肯定する者が多い。

次いで、「家庭経済」では男女平等とするもの12名(18.8%)、男女話し合いとするもの16名(10.5%)になっており、「保育」では、男女平等の学習が5名(7.8%)、女子だけとするものは1名など家庭科の学習内容で女子だけ学習するのがよいとする者は殆どいない。

表7 家庭科学習内容に対する男女生徒の認識

項目	領域	調理	保育	家庭関係	家庭経済	住居	被服製作	手芸	衣生活のあり方	人数
男女平等にする		38 (59.4)	5 (7.8)	4 (6.3)	12 (18.8)	4 (6.3)	0 (0)	1 (1.6)	0 (0)	64 (26.7)
男女がはなし合い		10 (69.1)	12 (7.9)	6 (3.9)	16 (10.5)	10 (6.6)	1 (0.7)	1 (0.7)	1 (0.7)	152 (63.3)
女だけがする		10 (76.9)	1 (7.7)	1 (7.7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (7.7)	13 (5.4)
わからない		9 (90.0)	1 (10.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	10 (4.2)
答なし		0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (100.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0.4)
計		162 (67.5)	19 (7.9)	11 (4.6)	29 (12.1)	14 (5.9)	1 (0.4)	2 (0.8)	2 (0.8)	240

## 8. 高校生が望む家庭科の教師像

表8 家庭科の教師像

性別	項目	生徒を理解する	家庭科の専門知識がある	指導力がありよくわかる	体力があり健康である	研究心がある	創造力がある	明朗である	人間的魅力がある	人数
男子		53 (43.8)	10 (8.3)	16 (13.2)	3 (2.5)	3 (2.5)	4 (3.3)	12 (9.9)	20 (16.5)	121
女子		67 (56.3)	4 (3.4)	11 (9.2)	2 (1.7)	1 (0.8)	0 (0)	10 (8.4)	24 (20.2)	119
計		120 (50.0)	12 (5.0)	27 (11.3)	6 (2.5)	4 (1.6)	4 (1.6)	22 (9.2)	45 (18.8)	240

高等学校の家庭科学習において、男女生徒はどのような教師を望んでいるかについて示すと「生徒に理解ある人」男子53名(43.8%)、女子67名(56.3%)になっており、男女とも理解ある教師を望んでいる。次は「人間的に魅力ある人」男子20名(16.5%)、女子24名(20.2%)、「指導力がありよくわかる」男子16名(13.2%)、女子11名(9.2%)になっている。また「明朗な人」男子12名(9.9%)、女子10名(8.4%)になっている。

これらのことから教師は、指導に当たって学習者の学習効果を高める要因「生徒を理解する」「魅力のある」「指導力がありよくわかる」について考慮し、その要因を整備するよう努力するとともに、学習者の生活状況を出来得る範囲でよく知ることは、学習効果を高めることにつながる。従って生徒が自らのテンポで成長、発達していくことを充分に認識しなければならないであろう。

## ま と め

家庭科すなわち家庭建設の教育は、各人が家庭の有能な一員となり、自分の能力をいかしながら、家庭に社会に役立つようにする全教育の一分野である。この家庭科教育は、家庭内の仕事や、家族関係を中心におき、各人が自立して家庭生活に責任をとることができるようにするのである。

家庭における生活は、各人の生活にとって大きな、重要な部分であるので、各々の家庭生活において、知的な能率の高い一役をなすのでなければならない。このために学校において、家庭生活に必要な要素を改善し、伸展させて行くような指導を与える必要がある。

小学校の段階では、男女とも第5・6学年で家庭科を必修で学ぶことになっているので、中学校においても小学校での学習を土台に男女生徒が時代に生きる市民の教養としてまた生活基礎技術として主体・客体との関わりについて学び、義務教育の中でこれらのことが確立できるようにしなければならない。

高等学校においても、実際の活動の面において、各個人を対象とするが、家庭と社会との密接な相互関係を基調としなければならない。この家庭科の最終目的は、男女が協力して家庭生活の理解と評価を認識して、各個人が自立し、よりよい家庭人、社会人、国際人となることであろう。これは男女にひとしく必要なことであるが、特に男子、女子のそれぞれの特性をいかし、将来の生活の発展に向けての基礎確立のためにいっそうの理解と能力を身につける必要があると思われる。

家庭科教育のもつ本来の目的である「家族員として、自らのもつ役割を果たすのに役立つ生活技術を学ぶ」ことと「家族生活の維持と家族関係」大きくは人間関係を含めて、日常の仕事を計画し、実践し、その過程や結果を評価し、調整していく心の機能を育てる」という生活主体に関わる問題と生活目標を達成する生活技術（手先の技能を含む）とを育て、生活容体との関係において問題を意識し解決することができる力を培うようにしたいものである。

これらのことは、小学校、中学校、高等学校の家庭科の学習の中で、生徒たちが習得しておきたかったとしている内容と一致している。生活の展開される分野で、「工夫する経験」や「物を最大にいかす習慣」など、新しい布を用いての縫製や、更生利用方法による指導などが考えられる。また習得した「栄養に関する知識」も自己の食生活において「栄養のバランス」を図るところまで日常生活に還元させるようにしたい。その他に「社会生活に必要な心得を実践する方法」「家庭経済、管理的な処法」「家庭生活のあり方」などがあげられているが、いずれも、現在ならびに将来、生活の維持運営という生活全体の営みからみて必要な教材であろうと思われる。

さらに過去の家庭科の学習で興味のもてた領域では、「食物」が最も多くなっているが、現実の家庭科の学習では、「被服」「編み物」にかかる時間が多くかかるため、「保育」「家族関係」「家庭経営」「住居」などが望まれる学習にあげられていることになるが、理論のみでなく、生活技術として指導上の工夫が必要になってくるとと思われる。

調理実習の小・中・高校の習得状況では、男女とも「たまご焼き」「カレーライス」「みそ汁」「ポテトサラダ」が「ひとりで調理ができる」になっており、これらの技能が日常家庭で栄養のバランス等の知識と併用されて豊かな食生活の営みに活用されるよう期待したい。

「高校生が望む家庭科の教師像」では、「生徒を理解する」が一番多く男子（44.6%）、女子（55.4%）

になっており、次代を担う若い人達のよりよい生活力の育成に向けて、教える者として真の指導について考えたいものである。

稿を終えるに当たり、アンケートにご協力いただきました倉敷市内の県立高校2校の諸先生方と、生徒に深く感謝いたします。

最後に、この調査・研究を行うに当たりご指導をいただいた元岡山大学教育学部 深田貞子教授に深く感謝いたします。

## 参 考 文 献

- 1) 文部省 小学校学習指導要領 平成2年5月 P.94,95,96
- 2) 文部省 中学校学習指導要領 平成2年5月 P.90～93
- 3) 文部省 高等学校学習指導要領 平成2年3月 P.119
- 4) 村田泰彦, 一香ヶ瀬康子, 田結庄順子, 福原美江「共学家庭科の理論」光生館 P.147
- 5) O・Aホール, B. パオラッチ「家庭科教授法」宮原佑弘訳 桑田一監修 昭和43年P.103, P.195
- 6) 大橋登史子 中国短期大学紀要17号 昭和61年3月
- 7) 大橋登史子 中国短期大学紀要18号 昭和62年3月
- 8) 大橋登史子 中国短期大学紀要19号 昭和63年6月
- 9) 深田貞子 岡山大学教育学部研究集録64号 1983年